

<5月14日>
報告

父や祖父の体験をたどった1日

伊達 工

記念碑前の集い

5月14日、安野発電所の「安野 中国人受難之碑」前で、「中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い」を開催。中国からは、初来日の受難者の遺族29名に、西松安野友好基金運営委員の曲啓傑さん（遺族）、通訳の陳輝さんと趙淑玲さんを加えて総勢32名が参加した。日本側参加者は約50名。定刻の午前10時、岡原美知子さんの司会と趙淑玲さんの通訳で集いが始まった。

冒頭、日本で死亡し中国に帰ることができなかった29名と帰国後に亡くなられた方々に黙祷。

それから主催者挨拶に移った。初めに、西松安野友好基金運営委員長・内田雅敏氏が、「補償金は186名の方々にお届け済み。ひき続き未判明者を探す懸命な努力が続けられている。本日の追悼式を日中双方の協力で執り行うことが和解をより豊かに深めていくことにつながる。いつの日かこの『受難之碑』が『友好之碑』になることを願う」と述べた。次に、受難者・遺族代表の曲啓傑氏が、「『安野中国人受難之碑』は単なる記念碑ではない。歴史的責任を反省し、平和を実現する弛みない努力をしていくために、凝縮した歴史を刻んだ歴史の証人でもある。永遠に平和であるように願う」と挨拶した。次いで、西松建設代理人弁護士・高野康彦氏は所用で欠席のため、司会者がメッセージを紹介した。「安野における360名の受難者およびその遺族に改めて深甚なる謝罪の意を表明致します。3.11東日本大震災に際して中国からも多くの人的・物的支援をいただいた。この『受難之碑』が新たに積み上げられる互助、互恵の実績とともに日中友好協力関係のさらなる発展に寄与せんことを祈念する」。

続いて、来賓の挨拶をいただいた。安芸太田町長・小坂眞治氏の代理として栗栖芳則副町長、中国駐大阪総領事館の殷達奇領事、善福寺住職・藤井慧心氏、橋本博明衆議院議員の代理として秘書の杉本一行氏の4名が、2回目となるこの集いを機に改めて日中間の悲慘な歴史と受難者を偲び、日中の、そして世界の平和を祈念する思いをこもごも述べられた。

厳かに二胡の演奏が流れる中、献花が始まった。主催者、来賓に続いて遺族たちが献花した。何人かの遺族が父親や祖父の名が刻まれている石碑に歩み寄り、その名前を手でなぞり涙を流した。私は、6月23日沖縄慰霊の日、沖縄戦のすべての犠牲者の名前が刻まれた「平和の礎」の列の前で、父や母や肉親の名前をなぞりながら、いつまでも座り続ける遺族の姿を思い出した。更に、広島平和記念公園では原爆犠牲者の名前をなぜ石棺の中に閉じ込めてしまったのかと、私の思いは広がった。一人一人の原爆犠牲者の名前が石碑に刻まれて平和公園を埋め尽くす、その姿こそ広島が世界に反核・平和を訴える力の源ではないのかと。

当時を知る地元日本人と交流

集い終了後、遺族たちは発電所裏山の貯水槽の所に登り、収容所のあった場所を上から確認し、当時の生活と労働の実態の説明を受けた。

昼食をはさんで、坪野地区交流センターで、当時を知る地元日本人から話を聞いた。谷キヨコさん（86歳、坪野）と尾坂秋三さん（83歳、津浪）が、遺族たちに当時のことを伝えようと、来てくださった。当時、4カ所に設けられた中国人収容所は集落の中にあつたので、多くの日本人が中国人の様子を見ていて、中国人に同情を寄せる日本人も少なくなかった。1999年には、谷さん、尾坂さんなど11人が広島地裁に陳述書を提出して、原告の被害を裏付けてくれたのだ。



谷さん(右)と尾坂さん(左)の話を熱心に聴く遺族たち

谷さんは、家の横をトロツコの軌道が通っていたので、「中国人が作業の途中でこっそり庭に入ってきて、おばあさんは水を飲ませてあげたり、じゃがいもを焼いてあげたりしていた。中国人は気の毒なほどやせていた」と話した。

尾坂さんは、何十年も前のことであまり憶えていないと前置きして、「自分は測量の仕事をしていた。隊長の『ホンリー』さんは、本当に良い人で一番頭に残っている。トンネル工事を夜昼休みなく行っていた。朝、飯場を出て2列になって歌を唱いながら仕事に行っていた。冬は雪が多いのに、地下足袋が破れ、そこに新聞紙を詰めて。ひどいのは雪の上を裸足で。靴は一つもなかった。嬉しかったのは、ある日、小さな牛（鳴瀬組の社長が買った）を食べると言って牛を川原でさばいて……。私もよばれておいしかった。津浪の中国人は皆仲が良かった」と、当時を振り返って話された。そして、最後にこう結ばれた。「こうして皆さんにお会いできて嬉しい。これを機会に死んでいくまで仲良くやりましょう。帰られたら奥さんにもどなたにもよろしゅう伝えて下さい」と。

尾坂さんの話は、悲惨で正視するのが耐えられないような収容所生活の中で、何か人間の尊厳というか暖かみというか、そんなものが私たちに伝わってくるような話だった。特に、「帰られたら奥さんや皆さんによろしくお伝え下さい」の言葉が心に沁みだ。

2人の話を聞き終わって、曲啓傑さんが、「帰国したら皆様によろしくとの言葉に感動した。訴訟でのお二人の証言が高裁での勝訴につながり、和解までの大きな力になった。遺族・受難者を代表して感謝申し上げます。どうぞお元気で」とお礼の言葉を述べた。

津浪、香草、土居の現地に立つ

それから太田川の上流に向かって、津浪、香草、土居を順に訪ねた。

津浪収容所跡は、今は田んぼ。植えられたばかりの稲が風にゆれていた。尾坂さんは、収容所の位置や構造などを説明した。津浪に収容されていた遺族たちは尾坂さんの話を聞き漏らすまいと、尾坂さんの傍に集まっているのが印象的だった。

香草収容所跡は、今は一面の杉林。ここでは、収容所の監視員をしていた父親と共に見聞きした当時14歳だ



尾坂さんを囲んで記念撮影する津浪収容所の遺族たち

った栗栖薫さんの話を聞いた。栗栖さんは、木造で板張りの宿舎、中国を出たときから着の身着のままの姿など、自身が見た悲惨な労働と収容所の日々を具体的に、人間としての怒りを込めて涙ぐみながら話した。話し終わると、遺族が思わず栗栖さんに抱きついた。人間としての心の通い合いに、こちらも熱いものがこみ上げてきた。

最後は、土居の取水口。1944年8月に17人が便所の板壁の下の土を掘って逃げたがその日のうちに全員捕まえられたことを川原さんが紹介すると、遺族の1人が自分の父親が逃げたと話し、別の遺族も自分の父親も逃げて捕まり制裁を受けたと話す場面があった。土居の生活と労働について証言してくれる人がいないので、邵義誠さんの証言の一部を川原さんが紹介した。

次の世代にどう引き継ぐか

今回の訪日団はすべて受難者の遺族で、息子さんや娘さん、そして、お孫さんに当たる人々だった。前回の幸存者を含む訪日団とは違う時間だった。

広島空港でお会いし、その後お話を聞く度に日本人が行った強制連行・強制労働という行為がこの人たちの平和な日々、日本の中国侵略下での日常だから平和な日々という表現は適切ではないが、それでも平和な日々を突然奪ったのだ——という重みに打ちひしがれる。そんな思いが心に残る重い重い時間だった。

今ひとつ、訪日団が子どもや孫の世代に移っていく今、私たち日本の運動も次の世代にどう引き継いでいくのか。これも大きな宿題として残る今回の取り組みだった。